

おいしいね

静岡県 鈴木 衛

おっ母は九十二歳である。一年前の秋の日にカレーを作っていて、うつかり鍋をこがしてしまった。この時、職場にいる私に電話をかけてきた。開口一番「晩のおかず、何か買ってきて」。その後で事情を聞かされたが、気がいたら台所は煙でもうもうだったそうだ。一人で大変だったろうことは想像がついた。それ以来、食事を作るのは長男の私の役目となっている。母と私とは二人暮らしである。

炊きたてのご飯に味噌汁と野菜炒めに卵焼き。我が家の朝の定番だ。「おいしい」と口にするおっ母。今夜は何にしようかと考える。食事が済むとテーブルを片付け、職場に向かうのだが、私はいくばくかの心配を抱えていた。それは、一日の仕事が終わり、家に帰る夕方遅くまでは、母が家に一人で居ることだった。近所の方が時折、声をかけ覗いてくれているが、それでも常には一人だ。今年の春になって、職場の清掃に来ているMさんに話をする。「デイケアがいいわよ」と教えてくれた。最初は、知らない人たちの中に入って行くことになるが、すぐに慣れるという話だった。後日、母を連れて、役場の包括支援センターに出向いた。簡単な介護認定のテストがあり、おっ母は、さほどの支援も必要としないほどのレベルだった。二カ所のデイサービスセンターを紹介するので、一日体験をして、どちらかを選んで欲しいということだった。

今月は、美容院に連れて行くのだが、通っていた美容院が事情で閉店してしまっていた。私の行きつけの理容店が美容院を併設しているので、そこに連れて行った。帰りに車の中で、美容師さんと楽しく話しが出来たといっって嬉しそうに話す。よし、デイケアに行けば、おっ母も毎日が楽しくなるかもしれない。そして、センターの所長さんから連絡があり、デイサービスの一日体験の日が決まった。

六月に入って、おっ母の食が細くなった。味噌汁も具を残してしまい、野菜炒めや卵焼きにもほとんど手を付けないでいる。ご飯もちよっと食べるだけだ。

「おっ母、口がまずいのか？」私は訊いた。

「ううん。美味しいよ。美味しいけど、お腹に入っていないんだよ」

私は、行ったことのないデイケアのことが気に掛かっているのじゃないかと考えた。あまり、気持ちを言葉にして口にしないおっ母のことだ。戦時をくぐり抜けてきたこの世代の人たちは辛抱強く、内面を表に出すことをしない。日曜日の朝、食事が済むと、私は、訊いてみた。「おっ母。よかれと思って話しを進めてきたが、デイケアに行くのは、本当はどうなんだ」。

「あたしは、こうして家に一人で居ても、お前の帰りを待っているのがいいんだ」

デイケアのことは、私の気持ちから出たことで、そのことを思えば、おっ母の方は、気が進まないとは言えないのである。「よし、わかった」。翌日、私は包括支援センターに電話を入れた。事情を話して今回の体験はキャンセルしてもらった。

その夜、お風呂に入っているおっ母がか細い声で、二階の部屋にいる私に「衛う。お風呂、一緒に入るう」と言ってきた。

私は、最初、聞き取れなくて二階から聞き返したが、意味が判ると「何を言っているんだ」と思っ取り合わなかった。出る頃を見計らって風呂場に行き、母を抱きかかえて立ち上がらせ身体を拭いた。

翌日の夕方のことだった。私が仕事から戻るとテーブルの上が、朝の状態のままだった。朝に、箸の進み具合が芳しくなかったが、出勤時間もあるのでそのままに出かけたのだ。私が「朝のままじゃないか」と言うと、おっ母は「一度、片付けて、お昼になって出して食べた」と言った。それは嘘だ。ほとんど食べられなかったのだ。後の日になって判ったことだったが、母はこの時、一人で大事を悟っていたのに違いなかった。

明日、病院に連れて行こう。「おっ母。一度、お腹とか診てもらおうか!」。翌日は休ませてほしいと会社に電話を入れ、布団を敷いておっ母を寝かせた。

次の日の朝のことである。いつものようにご飯の支度を済ませ、おっ母を起こしに部屋に入った。おっ母は布団に入っただまま、亡くなっていた。

身体にはまだ温もりがあった。それにもまして安らかな寝顔だった。おっ母は死んだのだ。口元には、うっすらと笑みを浮かべている。

私は、消防と警察に電話をした。母は、医者にはかかっていなかったのだ。そして、妹と弟に電話をし、すぐ来るように伝えた。

消防と警察の人たちが来るまで、私はおっ母の手を取って「お母さん、ありがとう」。「お母さん、ありがとう」と何回も言った。おっ母にはもう声は届かない。それでも、届くかのように何度も言った。「お母さん、ありがとう」。